青森県埋蔵文化財調査報告書第166集

三内丸山（2）遺跡Ⅲ

平成5年度

青森県教育委員会

調査区全景（平成４年８月撮影）

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過と調査要項……1
　1．調査に至る経過と調査の経過……1
　2．調　査　要　項……2
Ⅱ　調　査　概　要……3
　1．平成４年・５年度の調査概要……3
　2．各地区の概要……6
Ⅲ　ま　と　め……19

序

本書は、県営運動公園拡張事業に伴い、その予定地内に所在する青森市三内丸山（2）遺跡の記録保存のため、平成4・5年度に実施した発掘調査の結果をまとめたものです。

調査の結果、本遺跡は縄文時代前期・同中期・平安時代・中世の複合遺跡であることが明らかになりました。特に縄文時代前期・中期においては我が国屈指の大規模集落であることが判明しました。

さらに、縄文時代前期の泥炭層の中から、多くの木製品・樹皮製品・骨角器・植物種子等が出土しましたが、その内容は、これまでの縄文文化観を見直さなければならないほど高度に発達していたことを示しています。

本書は、これらの成果の一部をまとめたものにすぎませんが、今後の埋蔵文化財保護と研究に役立てれば幸いです。

最後に、調査および本書作成に尽力いただいた関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成6年3月

青森県教育委員会

教育長　石　川　正　勝

三内丸山遺跡対策室

例　　言

1　本報告書は、平成４・５年度に実施した県営運動公園拡張事業に係る三内丸山（２）遺跡の発掘調査概報である。

2　本報告書の執筆は、各担当者が協議し、分担して行なった。

3　本書に掲載した地形図（遺跡の位置）は、建設省国土地理院発行の２万５千分の１の地形図を複写したものである。

4　発掘調査及び本概報書作成にあたって、下記の諸氏から御協力・御助言を得た（敬称略、順不同）。
小林達雄、林　謙作、佐原　真、春成秀爾、石野博信、阿部義平、菊池徹夫、岡村道雄、
福田豊彦、桐生正一、高田和徳、坂井秀弥、阿部千春、千代　肇、冨樫泰時、小林　克、
宇野隆夫、須藤　隆、富岡直人、設楽博己、小杉　康、家根祥多、瓦吹　堅、上野修一、
橋本澄夫

作業風景（平成５年12月）

Ⅰ　調査に至る経過と調査要項

1．調査に至る経過と調査の経過

県土木部では、県営運動公園の拡張事業を計画してきました。事業計画の進展に伴い、予定地内に遺跡が所在するため、県土木部と県教育庁文化課は数度に渡る協議を行った結果、平成４年度から発掘調査を実施することになりました。

平成４年度は、野球場建設予定地と高圧線鉄塔移設予定地（３ケ所）に伴う発掘調査を４月20日から11月30日まで実施しました。なお、野球場建設予定地の調査は、工事工程の関係から内野スタンド部分から開始しました。

調査の結果、№６鉄塔移設予定地からは大量の土器・石器が出土しました。また、野球場建設予定地からは縄文時代前期・中期の数多く竪穴住居跡の他に大規模な墓域も発見されるなど我が国屈指の大規模集落であることが判明しました。このため、当初の調査計画の変更を余儀なくされました。

平成５年度は、前年度に引き続き野球場建設予定地と№６鉄塔移設予定地の調査を４月12日～11月19日の予定で調査しました。

調査の結果、№６鉄塔移設予定地からは、日本最古級の漆器が縄文時代前期の泥炭層から出土し注目されました。また、泥炭層の中から樹皮製品・木製品・動物遺体・植物種子・骨角器等が出土しました。野球場建設予定地からは、１万箱を越える遺物包含層や長軸30ｍ以上の大型住居跡を検出しました。調査の進展に伴い、予想をはるかに越える遺物量と遺構の重複が激しいため、調査は慎重を期して行われ、そのため発掘調査期間を12月17日まで延長しました。

発掘調査は平成６年度も継続予定です。

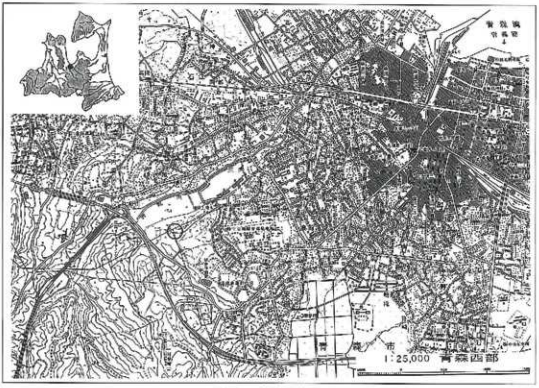


図１　遺跡の位置

2. 調 査 要 項

1　調査目的

県営運動公園拡張事業に先立ち、当該地区に所在する三内丸山（2）遺跡の発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資する。

2　調査期間

平成4年4月20日から同年11月30日まで（当初、4月20日から11月13日まで）
平成5年4月12日から同年12月17日まで（当初、4月12日から11月19日まで）

3　遺跡名及び所在地

三内丸山（2）遺跡
青森市大字三内字丸山223、ほか

4　調査面積

平成4年度　22,000平方メートル
平成5年度　18,000平方メートル

5　調査委託者

青森県土木部

6　調査受託者

青森県教育委員会

7　調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

8　調査協力機関

青森市教育委員会、東青教育事務所

9　調査参加者

平成4年度

調査指導員　村越　　潔　弘前大学教授（考古学）
調査協力員　花田　陽悟　青森市教育委員会教育長
調　査　員　小山　陽造　八戸工業高等専門学校教授（分析化学）
　　高島　成侑　八戸工業大学助教授（建築史）
　　赤沼　英男　岩手県立博物館専門学芸員（保存科学）
　　市川　金丸　青森県立郷土館学芸課課長補佐（考古学）

山口　義伸　青森県立板柳高等学校教諭（地質学）
高橋　　潤　青森山田高等学校教諭（考古学）
奈良　昌毅　青森県立青森北高等学校教諭（考古学）
調査担当者　青森県埋蔵文化財調査センター
調査第二課長　三浦　圭介
主　　査　岡田　康博
主　　事　三浦　孝仁、阿部　美杉、小笠原　雅行
調査補助員　相馬　和徳、斎藤　慶吾、稲見　庸子、神　美雪、葛西真里子、
　　穐元利美子、佐々木日澄美、内田　裕子、北林　美香

平成５年度
調査指導員　村越　　潔　弘前大学教授（考古学）
調査協力員　花田　陽悟　青森市教育委員会教育長
調　査　員　渡辺　　誠　名古屋大学教授（考古学）
高島　成侑　八戸工業大学教授（建築史）
西本　豊弘　国立歴史民俗博物館助教授（動物考古学）
辻　誠一郎　大阪市立大学講師（植物学）
南木　睦彦　流通科学大学助教授（植物遺体）
清水　裕彦　京都大学助教授（考古学）
赤沼　英男　岩手県立博物館専門学芸員（保存科学）
市川　金丸　青森県立郷土館学芸課課長補佐（考古学）
山口　義伸　青森県立板柳高等学校教諭（地質学）
天間　勝也　平内町立茂浦小学校教頭（考古学）
葛西　　励　青森山田高等学校主事教諭（考古学）
奈良　昌毅　青森県立青森北高等学校教諭（考古学）
調査担当者　青森県埋蔵文化財調査センター
調査第四課長　成田　滋彦
上　　査　岡田　康博
主　　事　木村　真明、成田　　悟、阿部　美杉、長瀬　　昇、工藤　直樹、
　　中村　哲也、小笠原　雅行
調査補助員　相馬　和徳、小山　浩平、小野　彰仁、鈴木　義智、熊谷　雅順、
　　三上　直人、秦　光次郎、長内　孝幸、近藤　輝美、内田　裕子、
　　鹿内ふさ子、神　　美雪、戸川　雅子、斎藤　昭子、中村　照子、
　　穐元利美子、葛西真里子、佐藤　敬子、田沢由加里、森内　純子、
　　成田由美子、大引　徳恵、館山　純子、堀内　珠枝、伊藤　菊乃、
　　斎藤　光子

Ⅱ 調 査 概 要

1．平成４年・５年度の調査概要

平成４年度には野球場建設予定地（主に三塁側・一塁側スタンド）と野球場建設に伴う高圧線鉄塔移設予定地３ヶ所（№６、７、８鉄塔）を調査しました。平成５年度には野球場建設予定地（主に一塁側スタンド・外野スタンド・内野グランドの一部）と№６鉄塔移設予定地の継続調査を実施しました。

調査の結果、縄文時代前期（約5500年前）・中期（約4500年前）・平安時代（約1000年前）・中世（約400年前）の遺構・遺物を発見しました。

野球場建設予定地からは縄文時代前期から中期にかけての大規模な集落跡や平安時代の集落跡、中世城館の一部が検出されました。

前期では大型住居跡や土坑、埋設土器群の他に広範囲にわたる遺物廃棄ブロック（捨て場）が注目されます。中でも遺物廃棄ブロックは沢地や台地の縁辺部に形成され、前期中葉の時期は泥炭層となっています。その層からは大量の土器、石器はもちろん通常の状態では残存しない食物の残滓と考えられる獣骨や魚骨、堅果類、種子類や木製品・骨角器が出土し、当時の食生活や自然環境を知る上で貴重な発見と考えられます。

中期では多数の竪穴住居跡の他に埋葬施設と考えられる土坑墓群、掘立柱建物跡、大規模な遺物廃棄ブロック、粘土採掘穴が発見されました。土坑墓は平面形が小判形や楕円形で、同じ方向に向き、東西に整然と配置された集団墓地で、当時の葬制を知る上で注目されます。遺物廃棄ブロックは大量の遺物と排土を同時に廃棄したもので、盛り土遺構とも呼べる大規模な土木工事によって形成されたと考えられます。これらは台地の縁や谷に向かって形成され、特に南西の廃棄ブロックは小山のような状態でした。掘立柱建物跡は平面形が長方形で六本柱から構成される大型の建物跡と考えられます。中には柱穴から木柱がそのまま残存して出土したものもあります。土器作りのための粘土採掘穴は不整形で、円形の採掘跡が連続しているのが確認されました。

№６鉄塔移設予定地からは縄文時代前・中期の遺物包含層（泥炭層）・中期の竪穴住居跡・中世の堀跡が、№７鉄塔移設予定地からは縄文時代中期の集落跡の一部が、№８鉄塔移設予定地からは平安時代の集落跡の一部が検出されました。これらのうち、№６鉄塔移設予定地の前期の遺物包含層（泥炭層）からはおびただしい土器・石器の他に大量の動・植物遺体や木製品・樹皮製品・漆器・骨角器がまとまって出土しました。漆器は日本最古級のものと考えられます。保存状態も良好で当時の技術の高さを知ることが出来ました。

他に注目される遺物として完形の青竜刀型石器やひすい製大珠が３個まとまって出土しました。

平安時代の集落跡は南向きの斜面に形成され、大きく二時期にわたると考えられ、そのほとんどに火災の痕跡が認められます。

中世から近世にかけての井戸跡やかまど跡、溝跡や陶磁器・木製品・古銭が発見されています。

これらの他に縄文時代早期・後期、弥生時代の遺物が出土しています。

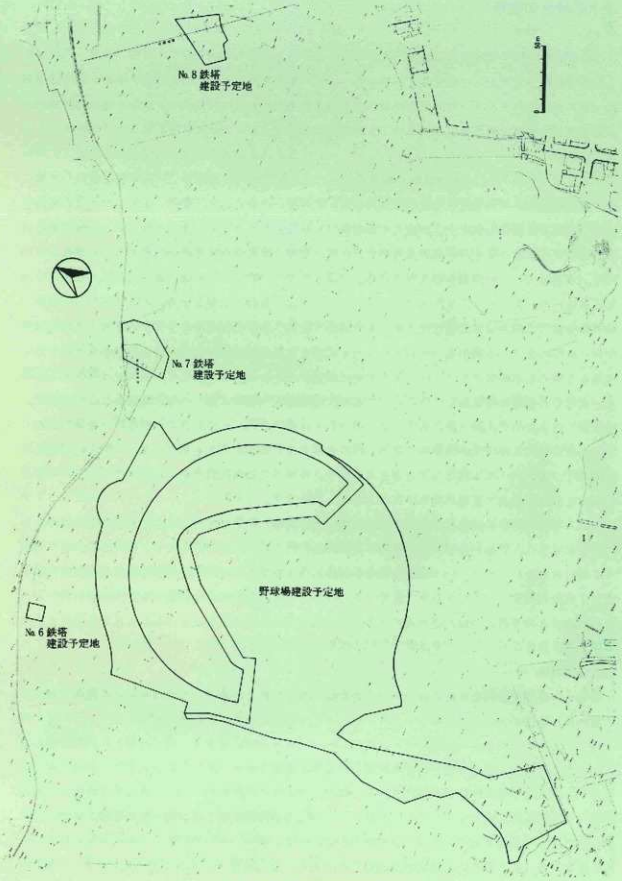


図2　調査対象区域図

2．各地区の概要

(1) 野球場建設予定地の調査概要

野球場建設予定地からは縄文時代前期中葉～中期の集落跡、平安時代の集落跡、中世～近世の城館の一部が検出されました。特に縄文時代の集落跡は全国でも有数の大規模で、しかも集落の全体の様子が具体的に理解できる貴重な資料です。

竪穴住居跡

これまでに約200軒の竪穴住居跡が検出されました。縄文時代前期中葉（円筒下層ｂ式期）の竪穴住居跡は平面形が楕円形もしくは隅丸長方形で、床のほぼ中央に地床炉が作られ、主柱穴は中軸線上に炉を挟んで２個作られます。少数ですが壁柱穴を巡らすものがあります。前期末葉（円筒下層ｄ式期）の竪穴住居跡は平面形が隅丸長方形に近い楕円形で、床の中央に地床炉があり、主柱穴は四本柱です。本遺跡ではこの時期から大型住居跡が出現します。中期初頭（円筒上層ａ式期）になると平面形はほぼ円形になるとともに、床面に段をもつテラス状の施設が出現します。炉は地床炉と埋甕炉があり、主柱穴は四～五本で壁柱穴を持つものがあります。壁ぎわに環状のマウンドを巡らす特殊施設が作られ始めます。中期中葉（円筒上層ｄ・ｅ式期）になると平面形は楕円形と円形があり、しかも大型と小型のものがあります。炉は床の中央に埋甕炉が１～２個作られます。柱穴ははっきりしません。大部分の住居に特殊施設が作られています。中期後半（榎林式期）の竪穴住居跡はほぼ円形で、地床炉・四本柱です。同（最花式期）は円形ないしは楕円形で、土器片囲炉・石囲炉・地床炉があります。柱穴は四本柱ですが大型住居は六本柱になります。中期終末（大木10式期）の竪穴住居跡はほぼ円形で、地床炉・四本柱になると考えられます。今後さらに検出数が多くなりますので、より詳しい竪穴住居跡の構造や変遷が明らかになると考えられます。

また、平成５年度の調査で縄文時代中期後半（榎林式期）の大型住居跡（第91号竪穴跡住居跡）が発見されました。長軸が推定30m、短軸が９ｍ10cmの本遺跡で最大のものです。柱穴は現段階で14個（７対）確認されており、いずれも度重なる改築の様子を示しています。大きさは柱痕が直径70cm～１ｍ、これに対する掘り方が直径１ｍ50cm～70cmほどです。西側に１ｍ70cm×１ｍ20cmの石囲炉があり、これにも作り替えの跡が認められました。この大型住居跡の性格はまだわかりませんが、６年度も引き続き調査を行う予定です。

掘立柱建物跡

平成４・５年度の調査で約20棟の掘立柱建物跡が検出されています。そのほとんどに柱痕（埋土中に認められる柱があった痕）が確認され、柱穴として使用されていたことがわかります。

掘り方（柱を埋めるために掘る穴）は直径1.0～1.5ｍと非常に大きく、深さは深いもので２ｍ以上のものもあります。埋土はロームを主に用い、非常に堅緻なものです。柱痕は直径50～80cmぐらいのもので、平成４年度の一塁側内野スタンドの調査で検出された柱穴群の中に、腐食しきらないで木柱が残っているものがあります。それは直径が70～80cmで下部には加工痕が残っています。材質はクリ材が用いられていることが、鑑定の結果明らかになっています。その他にいくつかの木柱が見つかっています。残っているものは横断面が円形をしており、また確認される柱痕は円形が多く、木を半截（縦に断割る）したものは少ないようです。

規模は1間×2間が最も多く、次いで1間×1間が、最大のものでは1間×3間のものがあります。柱間寸法は多少の差はあるものの、桁方向で3ｍ前後、梁方向で1間当たり3.2ｍ前後です。弧状に周るもの、単純に直線上に並ぶものと考えられるものではなく、すべて平面形が長方形の建物跡として理解できるものです。

柱穴同士は切り合っているものが多く、建て替えが行われていたと考えられるものがあります。検出される場所もある程度限定されており、空間的な占地の意図があったものと思われます。また同じ規模で二棟以上並ぶ配置と考えられるものもあります。

掘立柱建物跡の時期については当然時間幅を持つものと考えられます。出土する遺物が非常に少ないため時期を決定するのは難しいのですが、遺構の重複から、縄文時代中期後葉の最花式期と考えられる竪穴遺構に切られるもの、縄文時代中期前葉の円筒上層ａ～ｃ式期の埋設土器遺構に切られるものなどがあり、出土土器も縄文時代中期ものに限られることから、縄文時代中期の前葉から後葉ぐらいと考えられます。

機能・用途については大変難しいのですが、周辺には焼土・周溝が検出されないことから高床式であったことも十分想定されます。今のところ倉庫や高楼のようなものと考えていますが、なかなか裏づける資料が無いため決定的なことは言えません。

埋設土器遺構

完全な形の土器を地面に穴を掘って埋める埋設土器遺構が、現在のところ約550基検出されています。縄文時代中期（円筒上層ａ～ｄ式期）のものです。埋め方は倒立しているものはごくわずかで、大部分は直立（正立）の状態で埋められます。土器には胴下部または底部に円形の穿孔があるもの、底部が無いものなどがあり、意識的に打ち欠いたものと考えられます。また、内部には拳大の礫（石）が1～2個入っているものもあります。当時の葬法と関連するものかもしれません。

これらの土器は中央の谷を挟んだ東側と西側の平坦面に埋められています。谷の東側では土坑墓に平行するよう並びます。西側ではある一定の場所に密集して埋められています。埋められる土器には時期差がありますが、埋める場所にはそれほどの変化はありません。

これらの埋設土器は小児用の墓と考えられています。八戸市蟹沢遺跡では胎児の骨片が中から出土したと報告されています。また青森市四戸橋遺跡でも土器の中から骨粉が出土していることが報告されています。人骨は残っていませんが、おそらく本遺跡の埋設土器も同様な使われ方をされていたものと考えられます。

埋設土器遺構は青森県内では散発的に検出されていますが、これほど多量に密集して出土した例はありません。

粘土採掘坑

平成4年度の内野スタンド調査で、非常に大規模な竪穴遺構が検出されました。特徴としては上位ローム（黄褐色火山灰）の部分は縦掘りし、下位ローム（赤褐色火山灰）の部分で横掘りします。底面はかなり不規則な楕円形ないしは不整形に掘り込んでいます。下位ロームは粘土質で乾燥すると硬くしまり、水分を含むと粘性が強くなるという特徴があります。これは東京都多摩ニュータウンNo.248遺跡で検出された粘土採掘坑に非常に類似するもので、本遺構も粘土を採掘するための遺構と考えられます。平面形は一定せず、最大のものは面積が、325㎡あります。他に比較的小規模のものも

調査区全景（平成５年11月）

中期遺物廃棄ブロック（平成５年11月）

図３

構配置図

中期集落跡（平成５年11月）

遺跡よりむつ湾を望む（平成５年11月）

ありますが、いずれも同様の特徴を有します。底面の不整形の落ち込みは、それぞれが一回単位の粘土の採掘量であると考えられます。

この遺構の時期は、堆積土下位からの出土土器がいずれも縄文時代中期後葉の時期であり、遺構の重複からもおおむねこの時期と思われます。最大規模の第1号竪穴遺構は、遺構の重複、底面出土土器から縄文時代中期後葉の最花式期と考えられます。

粘土採掘坑は青森県では初めての検出例で、これだけ大規模なものは縄文時代のものとしては多摩ニュータウンで検出されたものに次ぐ大きさです。調査は途中段階であり、素地粘土の適性や土器の胎土分析、一回当たりの採掘量の検討、さらにそれぞれの採掘坑の時期、周辺遺構との関連性や集落内での位置などの課題があります。

土 坑 墓

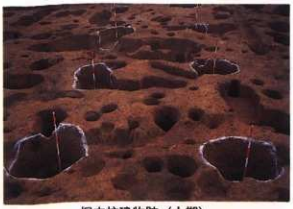
平成4年度の調査でお墓（土坑墓）と考えられる遺構が、100基検出されています。平面形は小判形や隅が丸い長方形のものがあります。規模は、長さが1.0～2.0ｍ、幅が0.6～1.0cmぐらいの大きさです。沖館川に面した谷の東側の平坦面に作られています。特徴としては、直線的な配置が見られることです。並び・主軸が北東一南西の土坑墓例が2列、同様に東一西の土坑墓列が3列あり、規則的な配置が認められます。昭和51年に調査した南側の現在西駐車場となっている部分では、南一北に土坑墓列が2列に渡って56基検出されており、埋葬に制約やきまりがあったことを伺わせます。

副葬品として底面からひすいの玉（ペンダント）が出土しているものがあります。また北海道式石冠と呼ばれる石器が底面から出土している例が3例あり、この石器の用途を考える上でも興味深い資料です。

土坑墓からは土器はほとんど出ず時期を決定するのは難しいのですが、細片で出土する土器は縄文時代中期のものであることから、同じぐらいの時期を考えています。

調査区 空撮（平成4年10月）

大型住居跡（縄文時代前期）



掘立柱建物跡（中期）

埋設土器（中期）

木　　柱（中期）

遺物出土状態（中期）

遺物廃棄ブロック（盛り上遺構）

野球場建設予定地の中央部の谷とその西側に縄文時代中期の大規模な廃棄ブロックが検出されました。西側の廃棄ブロックは最大で南北約70ｍ、東西約30ｍ、厚さ約２ｍの規模です。大量の土器・石器と同時に竪穴住居や土坑を掘ったときの排土や整地作業で生じた残土や炭化物を繰り返し廃棄することにより平坦面を作り出しています。それぞれが細かな層になり、それが何重にも重なっています。したがって、層の堆積状態を観察することにより遺跡での時間の経過を辿ることのできる良好な資料です。また、遺物の層位的な出土状態をとらえることが出来ます。例えば中期後半の榎林式の細分の見通しが得られたり、今後検討を要しますが大木８ａ式とみられる個体と円筒上層ｅ式が一緒に出土しました。両者の関係を示唆する資料と考えられます。今後も土器編年は勿論、石器組成の変遷や形態の特徴など石器研究の面からも成果が期待されます。他に土偶やひすい製大珠、獣骨が出土していますのでその目的・性格等を今後明らかにして行きたいと思います。

土　　器

大量の土器が出土しました。ほとんどは縄文時代前期・中期に属するものです。これらの時代の土器は円筒土器と呼ばれています。前期の円筒土器は文字どおり円筒形をしており、土器の口縁部に縄の回転や押しつけによる文様が付けられます。中期に入ると、口縁部は４つの山形突起がつき、文様は主に粘土紐を張り付け、前期に比べるとより華やかになります。器形も皿形やそれに台の付いたもの、注ぎ口の付いたものなど多様になってきます。中期後半以降になると東北南半の大木式器文化の影響が及び、円筒土器文化は次第に終焉を迎えます。

石　　器

数万点の非常に多くの石器が出土しました。種類・形態ともに豊富で縄文時代の技術の高さを示しています。もともとむつ湾沿いには石材となる頁岩が多く産出するので、これらを利用したものが大部分ですが、中には北海道産と考えられる黒曜石を石材としているものもあります。最も多く出土するのは狩猟用の道具で、矢じり（石鏃）・石槍等で、他にナイフ（石匙）、石斧（磨製石斧）、敲磨器類（磨石・凹石・敲石）等が出土しています。また、祭祀に関連したと考えられる石棒も出土しています。なお、矢じりには接着剤としてアスファルトを使用しているものが多数あります。

土偶・岩偶

土や石を使って、ヒトを形取った製品を土偶・岩偶と呼びます。平成４・５年度の調査で土偶は数百点・岩偶は10点前後出土しています。本遺跡は土偶の多い遺跡として有名で、古くは江戸時代に土偶の出土が記録されています。県内の発掘調査では土偶がこれほど多量に出土した遺跡はありません。土偶は縄文時代中期のもので、大きさはさまざまです。大型の土偶はその大半が壊れていますが、小型の土偶は完全な形のまま出土するものもあります。岩偶は泥岩などの軟質の石を用いています。多くは縄文時代前期に伴うものですが、顔の表現がつく中期のものも出土しています。また軽石製で土偶のように十字形に成形し、顔の表現がつけられる岩偶も出土しています。土偶も岩偶もほとんどは遺物の廃棄場所から他の土器・石器と共に出土しており、特殊な出土状況を示すものはありません。

土　製　品

土製品は、装飾品が圧倒的に多く、環状の垂飾品や玉や鈕状の耳栓などがあります。土偶との関連が指摘されている三角形土製品は20点以上出土しています。また県内では最古の例となるキノコ形土

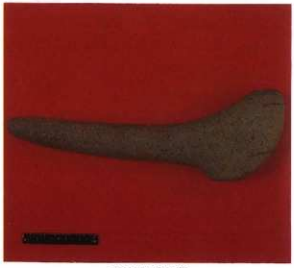
ひすい製大珠

漆　　器

土　　偶

岩　　偶

土・石製品



青竜刀形石器

製品も出土しています。他には縄文時代前期のミニチュア土器が数多く出土しています。

石 製 品

石製品には装飾品と、実用の利器ではない製品に大きく分けられます。装飾品は石の一部に穴が開けられ首飾りなどの垂飾品として用いられ、形もさまざまです。また、耳飾りとしては玦状耳飾りが完全な形のものも含めて4点出土しています。非実用的な製品としては青竜刀形石器と呼ばれる用途不明の石製品が完全な形で出土しています。他に石棒・石刀などの製品も出土しています。

また遠くから運ばれてきた遺物も出土しています。平成4年の調査では縄文時代中期後半の層からひすい製の大珠が3点出土しました。いずれも大きさは直径5cm以上で最大のものの重さは496gです。科学的な分析は今後行うことになりますが、いままでの例から新潟県の糸魚川産と考えられます。他に岩手県久慈産と考えられるコハク、北海道産の黒曜石製の石槍などが出土しています。

(2) №6鉄塔移設予定地の調査概要

調査区域は野球場建設予定地の北側、沖館川に面した河岸段丘斜面上に位置しています。調査終了時点で標高の最も高い南側と最も低い北側での比高差は約4m、調査前の表土からの標高差は約4.4mと非常に深くなりました。調査は野球場建設予定地と並行して行われ、平成4年7月中旬から粗掘りを開始しました。調査区域は一辺13mの正方形に調査区が設定され、調査面積は169㎡です。遺物包含層が低地にまで達し、湧水もあり難航しましたが、平成5年7月中旬に調査を終了しました。

本調査区で検出した遺構・遺物は次の通りです。

第Ⅱ層上面で調査区東壁から南壁へ屈曲して延びる、中～近世と思われる堀跡が1条検出されています。時期は詳細な出土遺物がないため不明です。

第Ⅲ層上面では縄文時代中期後葉の竪穴住居跡が5棟検出されました。炉は土器片を敷いたもの、地床炉がそれぞれ1軒、石囲炉が2軒、貼床の一部が検出されたものが1軒です。その他、土坑・柱穴や土器埋設炉（円筒上層式系で竪穴住居跡の可能性もありますが、堀に切られているため明らかにできませんでした。）が1基検出されています。

縄文時代の遺物包含層の層序はⅢ層が縄文時代中期で、厚さは最大2.2mを測ります。褐色ロームを主体としており、間層として砂・焼土・炭化物が入ります。間にほとんど黒色土を含まないことから、かなり短期間で廃棄・堆積したものと考えられます。この層からは主に縄文時代中期前半の土器が出土していますが、細分した各層の厳密な土器型式単位の出土状態をとらえることはできませんでした。

Ⅳ層・Ⅴa層は縄文時代前期円筒下層d_1式を主体とする層です。

Ⅴb層は円筒下層b式の新段階のものが出土しています。遺物の出土量が非常に多く、土器が敷き詰められた状態で出土しています。土器の廃棄には特定のパターンは無いようです。廃棄された土器は復元可能のものが大部分です。

Ⅴc層は薄い層ですが、土器の様相が若干変化し、円筒下層b式の新しいタイプと古手のタイプが混じりあって出土しています。この層からごく少数ですが骨角器が出土しています。

Ⅴc層とⅥa層の間にはニワトコの種子が層状に入ります。ニワトコは群生せず、種子が一ヶ所に数多く集中することはないとのことで、人為的な堆積と考えられます。Ⅵa層とⅥb層は泥炭層で、

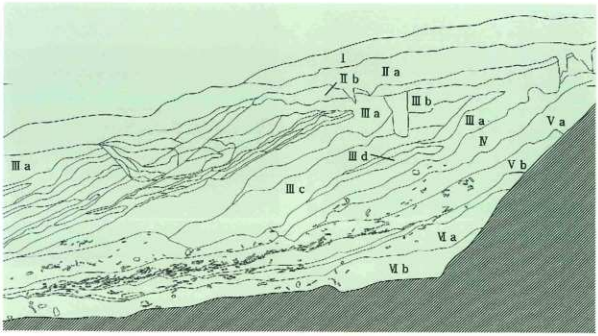


図3　基本層序

多数の骨角器・動物遺体・植物遺体・木材が良好な状態で出土しています。

出土した骨角器は、骨針・銛頭・骨篦・刺突具・ヘアピン・鹿角を利用したハンマー・鯨骨製の骨刀・針入れなどです。また垂飾品として牙玉が出土しています。

木材は多量に出土しましたが自然木が多く、加工・使用されていたものは住居の建築材・弓・ヘラ状木製品・用途不明のコケシ型木製品が出土していますが、量は多くはありません。漆器は台付皿・鉢が出土しています。台付皿の台の部分は欠損していますが透かし彫りになっているのが観察されます。材質はまだはっきりしません。表裏とも黒漆を塗った後に朱漆が塗られています。鉢は口縁部と胴部の境に当たる部分に段がつけられ、この手法は福井県鳥浜貝塚出土のものと共通します。材質については今のところ不明です。台付皿・鉢ともに焦がしてからくり抜くという手順で成形しているようです。

植物質遺物としては袋状、敷物（？）、などが出土しています。材質については現在分析中ですが、編み方は基本的には２本越え２本潜り１本送りが多いようです。その他蔓（？）を利用した５本組紐や結び目をもつ繊維も数多く出土しています。また用途は不明ですが、木に樹皮を巻きつけたものも出土しています。

種実は分析中ですが、今のところクルミ・トチ・ヤマブドウ・ホオノキ（炭化）・クリ・ヤマグワ・キイチゴなどが出土しています。

このⅥ層は２層に分けられますが、いずれも円筒下層ａ式期のものと考えられます。石器の組成としては石匙が非常に多く、磨る・敲くなどの敲磨器類も少なく、前期の円筒上器に特徴的な半円状扁平打製石器やこの時期にみられる抉入扁平磨製石器の出土も以外に少ないという特徴があります。

土製品・石製品については円筒下層ｂ式に伴う玦状耳飾りや岩偶が出土しています。円筒下層ａ式に伴うものとしては小型の土器（ミニチュア土器）が10点以上出土しています。

土　　器

№6鉄塔部分では縄文時代前期から中期にかけての遺物が出土していますが、ここでは前期の円筒下層a・b式について述べることにします。層としては4層に分層できました。Vb層は下層b式の新段階のもので、その特徴は、口縁部に絡条体回転文、胴部との境には低隆帯または原体の圧痕、胴部には縦位絡条体回転文が施されます。Vc層では口縁部に結節回転文が施され、胴部文様は絡条体・縄文が施されます。条は縦位のものが多く見られます。Ⅵa層では口縁部には結節回転文の施されるものが大部分で、胴部は斜縄文が増加し、原体は単節・複節・撚戻しが見られます。隆帯は太いものがつけられます。Ⅵb層では隆帯の割合が少ないようです。Ⅵa層と同様の特徴を持ちますが、胴部の原体は複節が圧倒的に多くなります。底面は文様が施されるものがほとんどです。Ⅵ層出土土器には波状口縁のものもあります。

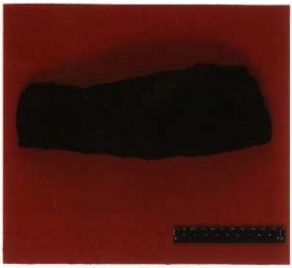
木製品・樹皮製品

鉄塔移設予定地の縄文時代前期の泥炭層からは土器・石器・骨角器のほかにも植物質の遺物が多数発見されました。

木製品には建築材の一部やヘラ状の道具などがあります。このほか、加工痕のない木材も数多く発見されました。さらに漆塗り木製品では円筒下層a式期の皿と鉢の一部が出土しました。皿は台付きで、台の側面に透かし彫りの痕跡があります。いずれも木胎漆器で、日本最古のものの一つです。

樹皮製品では棒状の木を芯にし、幅5㎜程度の樹皮を巻き付けたものが数点ありますが、用途は不明です。

樹皮や蔓を用いた編み物も数多く出土しました。最も遺存状態が良かったのはほぼ完形の袋状のものです。このほか敷物状、かご状のものなど編み方、素材もさまざまです。また、現存長8㎝ほどの5本組のひもや蔓を巻いてつくった直径10㎝ほどの腕輪のようなものも出土しました。



漆　　器（台付皿）

木製容器（鉢）

骨　角　器（釣針・銛先）

骨 角 器

鹿角や動物の骨を利用して作った骨角器が泥炭層から約270点程出土しました。内訳は装身具類（牙玉６点、ヘアピン６点）、釣針17点、銛頭４点、刺突具121点、骨針80点、骨篦１点、ハンマー１点、針入れ３点、櫛１点、鯨骨製骨刀２点です。貝塚出土の骨角器と違い保存状態が非常に良好で、製作時の痕跡や使用のためと考えられる光沢などを観察することができます。また、完形品が多いのが特徴で当時の形態や組成をそのまま反映していると言えます。これまで円筒土器文化期の骨角器は出土例が少なく、その内容がよく解りませんでしたが、これらの骨角器を分析することによって、どのような道具を使用しどんな獲物を捕っていたのか当時の漁撈を中心とした生業活動の一端を再現することが可能と考えられます。

動・植物遺存体

同様に動物の骨や堅果類・種子が大量に出土しています。これらは大部分が食物の残滓と考えられます。動物はツキノワグマ、シカ、イノシシ等の大型獣の他に、オオカミ、タヌキ、モモンガ、リス、ネガミ等の小型獣、クジラ、イルカ等の海性哺乳類、キジ、カモ、アホウドリ等の鳥類が出土しています。特にノウサギ、ムササビが多く出土しており、これらは食料としてよりも毛皮等の利用の可能性が高いと考えられます。また、マグロ、ブリ、ボラ、メカジキ、マダイ、ヒラメ、フグ、ニシン、イワシ、サメ等の魚類も多く出土しました。堅果類・種子ではオニグルミ、クリ、ヤマブドウ、サルナシ、ヤマグワ、キイチゴ、ニワトコ等が出土しています。特にニワトコは密集して大量に出土しており、その用途の解明が期待されます。これらの動物・植物遺存体を分析することにより当時の食生活はもちろん、周辺の自然環境等も詳しく知ることができます。

骨 角 器（牙玉・ヘアピン）

骨 角 器（針・その他）

動物遺体

土 層 断 面

遺物出土状態

木製品出土状態

木製腕輪出土状態

骨刀出土状態

木製品出土状態

鹿角出土状態

魚骨出土状態

Ⅲ まとめ

調査の結果、三内丸山（2）遺跡は縄文時代、平安時代、中世～近世に亘る複合遺跡であることが判明しました。特に縄文時代の集落跡はこれまで前例のないほど大規模で、しかも居住域、墓域、廃棄ブロック、粘土採掘穴など集落の構成が具体的に理解できる貴重な遺跡です。平成４・５度二ヶ年の発掘調査の成果を次に簡単にまとめてみます。

○縄文時代前期の集落跡は調査区中央の谷の西側に形成されています。本遺跡に集落が出現するのは円筒下層ａ・ｂ式でその後下層ｄ式まで継続します。谷及び台地北側には大規模な遺物廃棄ブロックが形成され、円筒下層ａ・ｂ式期には泥炭層となっています。その泥炭層から、大量の土器・石器の他に日本最古級の漆器や木製品、樹皮製品、骨角器、大量の動物遺体・植物遺体が出土しました。また、円筒下層ａ・ｂ式が層位的に出土しており、土器の編年研究の上でも重要な資料です。

○縄文時代中期の集落跡は、前半では前期に引き続き谷の西側に住居群が形成されます。遺物廃棄ブロックは東側の谷と西側の緩斜面にあります。後半になると本遺跡で集落が最も繁栄し大規模になる時期です。台地全体に集落が拡散すると考えられます。今回の調査区でも住居の他に、土坑墓、埋設土器群、掘立柱建物跡、粘土採掘穴が検出されています。土坑墓は台地のほぼ中央に南北に軸をもち、しかも東西に整然と並列して並んで検出されました。埋設土器群は谷を取り囲むように分布します。掘立柱建物跡は前半では集落の北側に、後半には台地のほぼ中央から多数検出されました。粘土採掘穴は調査区の東端からまとまって見つかりました。中期で特に注目されるのは遺物廃棄ブロックで、大量の土器・石器の他に土砂や炭化物も同時に廃棄し、それが繰り返し行われた結果、周辺よりも盛り上がってしまった盛り土遺構とも呼べるものです。この盛り土遺構は谷の西側、南側の谷の西側、台地の北側の３ヶ所から検出されています。いずれも大規模な縄文時代の土木工事と呼べるものです。また、土偶が多数出土したり、ひすい・コハク等他地域から交易により運び込まれたと考えられる遺物も出土するのも大きな特徴です。円筒土器も層位的に出土しており、特に後半期は円筒土器の終焉の問題と密接に関わってくる重要な問題を提起すると考えられます。

○平安時代の集落は南側の谷に面した南斜面と台地北側の辺縁から発見されました。状況からある一時期に営まれた集落と考えられます。

○中世～近世の遺構は台地北側から堀跡、溝跡、井戸跡、かまど跡が検出されました。おそらく城館の一部と考えられます。この城館については文献・伝承ともなく今回の発掘調査で初めて検出されたものです。

○平成５年12月末現在で総出土遺物量はダンボール箱で２万箱以上となっています。

このような大規模な三内丸山（2）遺跡は特に縄文時代の巨大な集落の姿を復元することの出来る貴重な遺跡です。平成６年度の調査や今後の整理作業や科学的分析を通じてその実態を明らかにしていきたいと思います。

最後に平成４年度の調査に参加されました北林美香さんが若くして亡くなられました。御冥福をお祈りし、本書をご霊前に捧げるものです。

（調査担当者一同）

青森県埋蔵文化財調査報告書第166集

三内丸山（2）遺跡Ⅲ

―県営運動公園拡張事業に係る埋蔵文化財発掘調査概報―

発行年月日　平成６年３月３１日
発　　行　青森県教育委員会
編　　集　青森県埋蔵文化財調査センター
〒038 青森市新城字天田内152―15
電話　0177（88）5701　Fax 0177（88）5702
青森県埋蔵文化財調査センター松原分室
〒030 青森市松原一丁目14―11
電話　0177（74）0455　Fax 0177（74）0456
印　　刷　東北印刷工業株式会社
〒030 青森市合浦一丁目2番12号
電話　0177（42）2221　Fax 0177（65）1115